

マテバシイは、ドングリをつける木（ドングリの木）の代表的な種で、2～3cmの細長い大きなドングリをたくさんつけます。昔は、マテバシイのドングリをコマにして遊んだり、実を炒って食べたりしました。一般にドングリはあくが強く、そのままでは食べられませんが、このマテバシイとスタジイはあくがなく、炒っただけで食べることができます。そのため、最近ではドングリクッキーなどにも使われるようになりました。このドングリは、実をつけるのに2年かかります。枝先をよく観察してみると、今年結実した小さな実と、2年目の大きな実をつけているのが分かります。

高さ15mほどになる常緑高木で、公園や屋敷の周りの防風林などによく利用されています。出雲平野の築地松の中には、クロマツでなく常緑広葉樹を使ったものがけっこう多く見られ、マテバシイがよく使われています。

マテバシイは、今では県内の平地部のいたるところで見ることができますが、もともとはこの地に自生していたものではありません。この木は、島根県より西南の暖かい地域の海沿いに自生する木で、暖流が直接当たる日御碕に一部自生地があるとされていますが、家の周りなどに古くからあるマテバシイも、先人が植えたものと考えられます。



▲ マテバシイの葉とドングリ